

## 第6章『マーティン・チャズルウィット』

### 声なきものたちの逆襲

畑田 美緒



「戸口の階段の下で倒れるペックスニフ氏」（第2章、フレッド・バーナードの挿絵、ハウスホールド版）

激しい秋風に吹かれてバタンと閉まった自宅のドアにぶつかり、地面に叩き付けられる姿は家庭での権威喪失を物語る。

『マーティン・チャズルウィット』の第一章は、チャズルウィット一族の「古色蒼然たる系譜」とそこに遍在する「暴力沙汰と浮浪性」を詳述することに費やされている。この記述により、ディケンズの次の長篇小説『ドンビー父子』のテーマのひとつでもある「継承」の問題を、ここでも意識せざるを得なくなる。<sup>1</sup> 一方『マーティン・チャズルウィットの生涯と冒険』という題名は、多くの教養小説と同様に青年マーティンが主人公であるとし峻すると同時に、同姓同名の祖父と孫の両方に言及しているとも考えられる。なぜなら、「頑固者」で「利己主義者」という、祖父の最も目立った特質は彼に固有のものでなく、「大むかしから……一族の欠点だった」（第六章）からである。若者はそれらが自分までは「くだつてきてない」と思っているが、物語の進行につれ、一世代飛んでいても欠陥の継承が確実になされていることが明らかになってくる。この問題は、「チャズルウィット父子商会」を営むアントニーとジョウナス父子においてさらに強力に提示される。父親が「利益の最高にきびしい原則にもとづいて」行った教育は息子の中に根付き、両者を同じ価値観を持つ似た者父子としている（第八章）。しかしながら、一族における継承はあまりにも負の要素が強調されているため、不変の継承に対する危懼／変化への希望を意識させずにはおかない。本論では継承と変化というテーマを、急速な変化を遂げるヴィクトリア時代に、抑圧され息をひそめている存在が表出する構図、という観点から考察する。

## 第一節 権威の喪失

この小説の第二章では、ペックスニフ氏とその家庭の様子が紹介される。彼は娘たちに「慈善 (Charity)」「慈悲 (Mercy)」と名付けたような道徳的で重々しく「崇高な意見と言辞をもつた人物」とされるが、それが皮肉であることは、建築家であるのに設計や建築をしたことがない、ということから明白である。また、自分の元を去ろうとしている弟子に対して、「金銭はね……諸悪の根源だよ」とお説教する彼が、実はこの弟子から金銭を巻き上げていたことも明らかになり、その表面と実態の乖離が暴露される（第二章）。うわべを取り繕うことにたけている人物は、『リトル・ドリット』のジェネラル夫人をはじめ他にも数多く登場するが、中でもその名前が「偽善的な、慈善家ぶつた (Pecksniffan)」を意味するようになった人物だけに彼は並はずれている。しかし、ペックスニフ氏を特徴づけるのは偽善性のみではなく、一家の主として、弟子を抱える指導者としての立場でもある。つまり、この人物に関しては「家庭における権威 (domestic authority)」や「男らしさ (masculinity)」の問題が深く関わっているのである。本節では「男らしさと理性、権威、決断力との結びつきが強固になっていた」<sup>3</sup> 時代において、ペックスニフ氏をめぐる出来事が、偽善性の暴露と「男らしさ」の喪失の過程、という両面を備えていることを示す。最初に登場する時、晩秋の「いきり立つ風」が家に入ろうと

していたペックスニフ氏に「ものすごい勢いで表の戸をたたきつけ」、倒れた彼が階段の角で「すごい一撃を」くらう様子が目撃される（第二章、本稿の扉絵参照）。しばらく倒れたまま戸口を睨みつける彼の姿は、ペックスニフ氏の喜劇性を示唆するばかりではない。この一連の何気ない出来事は明らかに、終盤の第五章で、彼が老マーティンのステッキの「ねらいすました、したたかな一撃」で「床に打ち倒」され「二度と起きあがるうとはせず」に「あたりを見回している、という場面を予示するものであり、作品の他の部分とも深く関連するさまざまな側面を内包しているのである。無生物が生きているかのように描かれるのは、ディケンズ作品にしばしば見られるが、ここで風や扉が彼を打ちのめす様子は、この偽善者（現段階ではそれは明らかではない）に罰を与える隠れた力が働いていることを示唆しているようである。事実、父親の帰宅を知らない娘は、ノックの音はすれども姿がないので、いたずらかと思い「罰を受けることになりすから」と戸を閉めようとする。我が家から娘によって閉め出されようとするペックスニフ氏の姿は、家庭内での彼の立場の危うさを暗示すると同時に、「白髪まじりの」中年期における「男らしさ」の危機をも示している。

家から閉め出されかかった彼に訪れる次の出来事は、上述の弟子ウェストロックの反抗的な態度である。弟子の親や保護者から謝礼をだまし取ることを生業とする彼と何度も口論し、この家を出て行くことになった弟子の青年は、別れの前に和解の挨拶に来るが、心が傷つけられた、というそぶりで声を震わせ



図版①「床に倒れたままのペックスニフ氏」（第12章、フィズの挿絵）  
破門した弟子の眼前で起きあがれなくなってしまふ師匠の無様な姿。

る彼に、弟子は「嫌悪と軽蔑の情」をこめた言葉を残して去る(第二章)。だが、この家を出て行くのはこの弟子だけではない。小説前半では主人に心酔し、ウェストロックが下す「ベックスニフについての不当評価」を嘆くトム・ピンチさえも、ベックスニフ氏に言い寄られたことがメアリの口から暴露されると、一転して彼を「じつに我慢ならぬ悪人」と呼ぶようになる(第三章)。狡猾な主人の言いがかりで解雇され家を出たトムは、心中のベックスニフ氏の存在自体さえ否定する心境になっている。また、マーティン青年に関しても、老マーティンへの配慮からベックスニフ氏が破門するのであるが、大きく一步迫ってきた青年に思わず後ずさりし、「坐った姿勢のまんま床に倒れ……起きあがろうと努力もせずに、そのままになつて」(第二章) いる彼の姿は、冒頭の玄関で倒れている姿と共に、失われつつある彼の力を象徴している(図版①)。弟子たちに対して支配力が及ばなくなったベックスニフ氏は、師匠としての權威をも喪失したことになる。そのみならず、若いメアリへの求婚が拒否されたこともまた、彼の「男らしさ」に傷をつける出来事である<sup>5)</sup>。ベックスニフ氏に見る「支配力を維持する能力」(Heath 27) の喪失は、彼の男らしさの衰えの一側面ともいえる。

弟子たちばかりかチャリテイもまた、妹の結婚を機にベックスニフ氏の家を出て行くことになる。甲高い声で彼を非難する娘を最初は「からだを激しくゆすぶり立て」、黙らせようとすが反抗は収まらず、「落ちて着き払ったふうをみせかけようと

する彼の不細工な努力は、とことんまでわびしげ」で、「彼の言葉は……ご機嫌とりの調子になつて」(第三〇章) いくのである。このあと父娘は合意に達するが、「父親が子供に許しを求め」一図は、家庭における父親の權威の失墜を象徴している。チャリテイが実家を出て行くことで親子の断絶の問題が前景化されるばかりではない。二人の娘がともに結婚をめぐる(片方は結婚前に、もう一方は結婚後に) 不幸に陥ったこと、あるいは、不幸な結婚生活を送っている妹に対してチャリテイが「姉らしくふるまわず、思いやりもない」(第三章) 態度を取ることから、ベックスニフ氏が娘たちの名前にふさわしい教育を行うことができず、親としての資質に欠ける不適格者であることが分かる。『ドンビー父子』のスキュートン夫人や『アイヴィッド・コパフィールド』のマーク夫人のように、娘に財産目当てで愛のない結婚を強いる母親はしばしば登場するが、母親不在のベックスニフ家においては、父親がその役割を果たしている。トッシュが指摘するように、息子を一人前の男性に育て上げ、名前と血筋を受け継ぐことの出来る男らしさを身につけさせることが父親の社会における地位をも保証した (Fosd 4)、という当時の価値観を体現するドンビー氏の場合とは異なり、息子がいないベックスニフ氏は、娘たちを嫁がせることによつて後世への継承の希望をつなぎ、かつ、自身の社会的地位をも得ることになると考えられる。しかし、婿としてジョウナスを選択したこと、結婚をめぐる姉妹の不和が彼の親としての資質不足と權威の失墜を証明している。これは、弟子の育成失敗

と共に、ペックスニフ家におけるジェネラティヴィティの欠如を明らかにするのである。<sup>6</sup>そして、マーティン老人に打ち据えられて倒れる彼の姿は、彼が老人に対してふるおうとしていた支配力が彼に対して跳ね返って来た結果のようでもあり、押さえつけられ沈黙していた老人の中に潜む「男らしさ」が、彼に復讐を遂げたようにさえ見える。これは同時に、ペックスニフ氏が前世からの継承者としても不適格であることを示すもので、潤滑な世代交代と正しい継承が行われることの困難さをも物語っている。

## 第二節 老人たちの復権

前節では「白髪まじりの」ペックスニフ氏を襲った中期における「男らしさ」の危機について述べた。社会の枠組みの変化に伴って、いわゆる「男らしさ」が「紳士らしさ」ではなく、「自主性と肉体的な強さ」で測られるようになった十九世紀において、「高齢の男性は、ますます周縁へと押しやられるようになって」(Heath 13, 30) という。その一方で、ヴィクトリア朝の文学や絵画などの芸術は老人たちの存在を軽視していたわけではなく、「年齢を十分に考慮し始めることを始めつつあった社会と文化の中で、年を取るという経験から意味を引き出すために」「老年期を人生に不可欠な段階として理解するための概念上の基盤形成を手助けする言葉や像を提示している」という指摘がなされている。以下では、家族内や親族内における老人の

立場という観点から、「教区に対する脅威と重荷」とみなされ周縁に押しやられそうな老人が再び中心へと躍り出る事象について考察する。

小説の主要人物の一人である老マーティンは、「長年にわたって老齢と病・無能力・離脱・衰弱が結びつけられて来たこと」を証明するような形で登場する。本来は「鉄の意思とラッパの声をもった元気でたくましい老人」でありながら、旅の途中で「突然病気になる」「命取りの病気になるのじゃないか」と本人も心配している(第三章)。物語の中盤で、兄弟のアントニーの死後、老マーティンは「重大な変化」をとり、「人間的な色彩すべてが色褪せて……視力は前ほど鋭くはなく、ときどき耳が聞こえなくなり」「ほとんどすべての人間にたいしても鈍感な無関心状態に陥っていった」と描写される(第三〇章)。ヴィクトリア時代には、老いは実年齢よりもその人物が「肉体的、精神的な衰えを示すような行動をとり……老いて見える」<sup>10</sup>かどうかで判断されたという。この定義に従えば、まさに老マーティンは急速に「老人」の領域に入りつつあることが見て取れる。その「老朽の過程」に気づいたペックスニフ氏は、彼の財産を手に入れるために、老マーティンの「まわりに城壁をめぐらし」て「老人に対する支配権の確立」を試みる。前節で論じたペックスニフ氏の「男らしさ」は、老人に対する支配の面でも發揮されるのである。老マーティンはペックスニフ氏の家に身を寄せ、しだいに彼に依存するようになり、老人を「意のままにあやつる」というペックスニフ氏の計略は成功していくように思

われる。

さて、ヴィクトリア時代の社会の中で高齢者がおかれていた厳しい状況は、当時一般的に持たれていたと言われる「黄金時代幻想 (Golden Age Fantasy)」(Mangum 100) を生み出したとテレサ・マンガムは指摘している。この「幻想」のうちで、「昔は家族が年寄りの面倒を見ていた」という部分は、現実には子どもとは別居していた高齢者が多かったという資料が存在し、真実ではないと証明されているにもかかわらず、当時の文学に大きな影響を与えたという。ディケンズ小説もその例外ではなく、高齢者とその子ども(あるいは親族)との関わり方がさまざまな形で提示されている。中でも最も理想的なものの一つは、『大いなる遺産』におけるウエミックと八二歳の父親が住む、堀と跳ね橋で外界と隔絶された、城を模した家に象徴されている。また、これほどまでに完璧ではないにせよ、十四才という若さの『骨董屋』の主人公ネルは祖父の世話を献身的にし、『リトル・ドリット』でも、家族で一番年若いエイミが経済的な支えとなると同時に、年老いた父親の面倒を細やかに見る様子が描かれている。これらは一八三七〜三八年ごろに、救貧法に関わる役人は「家族が高齢の親族の面倒をみることを期待しており、それが進んで行われていない場合は強要し、行われている場合はそれをさらに強化していた」という当時の状況を反映するような家族のあり方である。ところが一方、『ハード・タイムズ』では、独力で貧しさを振り払って成功を収めた銀行家、という伝説を守るために、年老いた母親にお金を払って

遠ざけるバウンダビーが描かれる。経済的な支援は受けているものの、存在そのものさえ否定されているようなあり方は、親と子の距離をなおさら強調する結果となっている。また、『リトル・ドリット』のナンディ老人は、息子の仕事が不振で経済的に困窮したため、息子の家を出て救貧院に入らざるを得なくなり、いつまた同居できるかの見通しも立たないという状況である。

これらとはまた異なった形での老親と子どもとの関わりが、『マーティン・チャズルウィット』では提示されている。子どもに先立たれたマーティン老人は孫とも半ば断絶状態で、血縁関係のない若い女性メアリに世話をしてもらっている。彼の面倒を見ると申し出た親戚のペックスニフ氏は、身内への愛情や敬意からではなく、遺産を独占したいという欲望からそうしているにすぎない。彼が老人の周りにめぐらす「城壁」は、上述のウエミックの城が外敵から身を守るための城塞として機能しているのとは正反対で、むしろ老人を閉じ込める牢獄の役割を果たしている(第三〇章)。マーティン老人の兄弟アントニーの場合は、より明確な形で「抑圧の場所と救済の場所、両方としての」家庭という問題が前景化されているが、これについては次節で詳述することにする。

第五章ではそれまで老齢のもたらす徴候を示していたマーティン老人は、実はペックスニフ氏との同居の間に、表面上は善良に見える氏が「本性をじつにあからさまにあらわし……すべての利己心といかさまの権化」となる様子を目撃し、ある計

画を練っていたことが、これに続く「形勢すつかり逆転」と題された章で明らかになる。その計画は老人の本来の「きびしい心」と、それが「ながいことおし殺していたことで当然生じる不自然で否応なくつくりだされることになったたくましき」を伴って実行されることになる——マーティン老人は「燃えさかる怒りを一挙に激しく爆発させ、顔の筋としわすべてにそれをギラギラとあらわして……ベックスニフを床に打ち倒した」（図版②）のである。若さを失って次世代に抑圧されていた老人は、年下の男性に腕力で優位に立つだけではない。いったんは失われかけていた権力をも取り戻し、一世代下のベックスニフ氏がなし得なかった、「同じ日に……ふたりの娘を嫁にやる親」の役割まで果たす姿は、老人の男性としての社会的地位の回復をも示唆している。さらに、マーティン老人が提案した晩餐会に際しては「オースティン・フライヤーズのフィップスがこの晩餐会に出席して、じつに陽気な老人ぶりを發揮していたが、彼は、暗い事務所に身を閉じこめて、宴会好きな気分を手荒くおさえこんでいたのだった」という描写がある。フィップス老人の普段は「おさえこんでいた」（第五三章）本性の表出は、先述のマーティン老人の「おし殺していた」性格と共に、抑圧され社会の周辺に押しやられた老人たちの姿と重なり合い、まさに老人の復権を象徴する効果を生み出している。それをもたらしたのもまた、ベックスニフ氏が押し殺していた「本性」なのである。



図版②「尊敬すべき友人によるベックスニフ氏への熱烈なる歓迎」（第52章、フィズの挿絵）

マーティン老人の一撃は、これまで押さえいていた怒りの大きさを示す。

### 第三節 暴力依存と死者の告発

ペックスニフ氏の家庭が、親類の老人の面倒を見る保護の場としての役割と同時に、老人を抑圧して閉じこめる、ある種の収容施設のような役割を果たしていることを前節で述べた。本節では家庭が持ちうる監獄性と監視のテーマを、ジョウナスの家庭と彼の犯罪との関連で分析してゆく。

犯罪や犯罪者の心理に対するディケンズの興味はよく知られており、盗みや詐欺など彼の小説の中で扱われる犯罪は多様である。例えば『オリヴァー・ツイスト』では、残忍で乱暴なサイクスによるナンシー殺害に関して、殺人者の行動と心理が詳述されている。<sup>13</sup>ナンシーの裏切りに怒り、殺害した後には逃亡してさまざまの際、彼は彼女の幻影につきまとわれて非常な恐怖を抱くが、その幻は「どんよりとして光沢のない、大きく見開いて見つめる目」（第四八章）へと変貌し、いつそ彼を苦しめるようになる。『マーティン・チャズルウィット』でも、中心的一族の一員が殺人に手を染め、その後サイクスと同様の恐怖を味わう。<sup>14</sup>

しかしジョウナスは犯罪者の世界で育った訳ではなく、「チャズルウィット父子商会」の後継者として、祖父アントニーと暮らしている。仕事と家庭を完全に分離させるウエミックとは逆に、この父子は「薄暗い、きたならしい、煙った、いまにも倒れそうな、くさり果てた古家屋」（第一章）で商売を行いな

がら住んでいる。寛ぎの場であるウエミック城とは異なり、「快適といったものを肩で外におしだし」ているデスクや事務椅子は、「商売が第一の重要事項」という父子のモットーを体現しているのである。ここには父子の他に、年老いた事務員チャフィーがいる。熱病にかかつて以来、アントニーの言葉以外は理解できないこの老人を、ジョウナスはまるで見せ物を披露するようにいとこたちに引き合わせる。ジョウナスのチャフィーに対するあざけり言葉を聞いて、同じく老人である父親がその「辛辣さにたいしておどりあがってよろこんでいる」という不思議な光景が展開される。「抜け目なく、狡猾、貪欲」な息子が自分の「教育を受けつぐ者」であることを誇る父親は、ジョウナスが自分に対しても当てつけの言葉を口にすることを楽しんでる。しかし、ジョウナスがチャフィーや父親に対して行っていることは、高齢者に対する虐待——言葉による暴力——そのものである。さすがにジョウナスは、「冷酷無情な老いばれめ」というようなことばを、父親に聞こえるような声で言うことはしない。また、チャフィーのアントニーに対する態度を、財産目当てのご機嫌取りと曲解していらだつものの、老人の頭を殴るふりをするだけにとどめる。しかし、ジョウナスが押さええ気味に示す老人虐待の傾向を、のちに自身も「太った老婆」（第十九章）であるギャンプ夫人が代行する形で爆発させるのである。

父の死後、チャフィー老人の面倒を見るジョウナスの「気前のよさとやさしさ」（第十九章）に周囲は驚嘆するが、これは



見せかけにすぎない。そもそも「生まれてこの方、彼は老人に對して粗野、乱暴、残虐にふるまい、この老人に結びつけて、暴力沙汰は自然なことと、彼の心に映っていた」（第五章）というジョウナスが、チャフィーの世話をギャンブ夫人に依頼するのは、彼の思いやりのなさを証拠ともいえる。「あたしは貧乏な女にすぎず、お金が目的」（第二章）、と言い切る彼女は、チャフィー老人に對して、「辛辣で腹立ちまぎれの皮肉」を込めた「あざけり」を投げかけるのみならず、「上衣のカラーをつかみ、椅子に坐つた彼を何回も何回も勢いよく前後にゆすぶり立て……老人の顔がそうとう黒ずんで」（第六章）くるまで手を離さない。「沈静状態をひきおこす」ためのこの扱いの結果、患者は「ひどくフラフラに」なり「もうなにもしゃべれなく」なる。このような人物の手にゆだねられたチャフィーにとつて、家は「救済の場所」ではなく「抑圧の場所」に他ならない。事実、テイグの殺害以降、老人の言葉から犯行が発覚することを恐れるジョウナスは「チャフィーにたいする嚴重な監視」（第五章）を行うようになる。看護士の手も借りて老人を黙らせておこうという彼の目論みは、まさに家庭をパノプティコン的な牢獄そのものへと変容させてしまうのである。

チャフィー老人のみならず、妻マーシーもこの牢獄に監禁される囚人である。ジョウナスにとつて、彼女との結婚は、独身時代に自分をからかい軽視していた彼女に復讐するため、「自分が主人で彼女が自分の所持品である、として奴隷にするという目的」で行ったものである（Marcus 233）。マーシーはこの

家庭／牢獄で、夫から奴隷のような扱いを受けて過ごすうちに「昔とはすっかり変わって」（第三章）しまい、主人アントニー老人の言葉にしか反応を示さず、「頭がすっかりおかしくなつて」（第五章）いると思われるチャフィー老人さえもマーシーのことが気にかかる様子で、彼女のことをきつかけに以前とは別人のように振舞うようになる。

自分の犯罪の露見を恐れて、妻の長引く外出で不安に襲われていたジョウナスは、「イライラしたのしり声をあげて老人をつきとばし」、妻を呼び戻す使いを出すのであるが、使いが部屋を去つた瞬間に老人の態度は一変する（第五章）。これまでチャフィーに對して「嚴重な監視」をしていたジョウナスであるが、実はマーシーのことが話題になつて以来、「ふだんになく彼「ジョウナス」をジーツと見守っていた老人の事務員「チャフィー」は、いきなり彼におそいかかつて」きて、「彼のカラーを両手でつかみ、それをにぎりしめた」のである。ここでは、監視される側と監視する側の立場が逆転する瞬間が提示される。老人は、「髪の毛の一本だつて、虐待はなりませんぞ」「わたしは黙つてますが……わたしは話せるんですぞ」といい、「弱々しくはありませんが、脅迫的な顔」を向けさせられる。このあと彼は手荒いギャンブ夫人の看護＝監視の目にさらされて「何もしゃべれなく」なつてしまふが、無力に見える老人も発性を秘めていることが示されている。ジョウナスが「大つぶの冷汗」を額に浮かべ「内心では老人をひどくおそれている様

子は、老人の潜在力の大きさを物語ると同時に、このあとの重大な出来事の前触れとなっている。ちなみに、ジョウナスの不安定な立場は、第二四章でトムにステッキで殴りかかろうとして空振りし、「溝にへっつくばって倒れて」しまうというエピソード（図版③）でも、ペックスニフ氏の場合と同様、あらかじめ示されているのである。

さて、チャファイー老人に対して監視／監禁を行ってきたジョウナスは、上述の「ジーッと見守って」いる老人以外にも、監視の目があることに気がつかない。チャズルウィット一族のチェヴィ・スライムの友人モンタギュー・ティッグが「背の低い、干あがった、しなびた老人」ナジットを雇い、ジョウナスについての情報収集を命じているのである（第二七章）。興味深いことに、ジョウナスの監視は人間によってのみなされるのではない。モンタギューの殺害に向かうために馬車で移動しているとき、「夜の目」が彼を監視している——「生えている草や麦の葉一本として、監視していないものはなかった。静かであればあるほど、彼に対する監視の目は強烈に、揺るぎのないものになってくる感じだった」（第四七章）。それでも、彼は悔悛の情を抱くことなく殺人を遂行する。

さて、ナジットに話を戻すと、何者であるのか、どのような暮らしをしているのか、全てが謎に包まれたこの人物は、「彼がだれかの監視を行っているというより、自分がだれかほかの男の監視を受けていると彼が思いこんでいるといった印象」（第三八章）を与えながら、モンタギューの依頼に対して「ひと



図版③「ステッキを空振りして溝に倒れるジョウナス」（第24章、フレッド・バーナードの挿絵、ハウスホールド版）  
トム・ピンチを「貧乏人の徒弟」呼ばわりしたものの、このあとトムの反撃により傷を負う。

言もいわずにひきさがり」（第二十七章）、忠実にその任務を遂行する。秘密でないものには興味がないこの老人は、監視の結果得られた情報が立ち聞きされるのを恐れ、「口で言う」ことを頑に拒み、書類による報告に固執する。彼の姿は、沈黙を守るチャフィー老人と重なり合い、声を奪われながらも見つめる目は失わない老人の存在感を示しているようである。

声なき老人たちの存在感は、前出のクライマックスの場面でも頂点に達する。まずはベックスニフのもとで急速に老いの徴候を示し始めていたマーティン老人が、全く別人のようにふるまう。

いま彼は自分の共犯者の声を耳にし、それは、彼に面と向って、時と場所と事件逐一を述べ立て、留保条件、秘匿、怒りは抜きにして、洗いざらい真実すべてを公然とぶちまけていた。その真実は、どんなものでも抑えつけないわけにはいかず、血もそれを窒息させることができず、大地もかくしてはおけぬもの。真実のおそろしい靈感を受けて、老いばれもたくましい男に変わったような感じ、その復讐の翼に乗って、彼がそのときまで地の果てにいたいと思っていた者までが、空からまいおりて、彼におそいかかってくるのだった。（第五一章）

彼の告発を行う老マーティンの声は、殺害されたモンタギューの声と重なり合い、ジョウナスの父親殺しの罪をあばきたてるのである。老人は死に近いもの、伝統を伝えるものであるが故

に、人間と神との仲介者として一般的に認知されてきており、しばしば神のメッセンジャーの役割を果たす、と指摘されているが、ここではマーティン老人がこの世とあの世の橋渡しをし、<sup>15</sup>声なき死者の代弁者として真実を語る降霊術者のような働きをしているのが見てとれる。

さらに、ここではジョウナスが「森の中に隠し……大地の中に押しこみ、踏みしめ」たはずの「秘密」が「サツとおどりがあって姿をあらわし……まるで奇跡のように強健さをとりもどしたこの老人の唇からそれは発せられて、彼を告発する声となっている」（第五一章）様子が見られるだけではない。少し前にジョウナスに反抗するという変化を示していたチャフィー老人は、老マーティンの告発を受けて、「いつもは見かけられない火が彼の目に輝き、その顔に光を投げていた」状態でその告発の誤りを正し、アントニーの死の真相を明らかにする。「からだは大きくなったように見え、靈感を受けた男のよう」という老人の描写と、彼が雄弁に語る真実は、これまでは「黙って」いた老人が「話せる」ことを証明し、押し隠されていた秘密の暴露によって若い世代に罰を与えるのである。

#### 第四節 新大陸VS旧大陸

『マーティン・チャズルウィット』の中盤におけるアメリカのエピソードは、『骨董屋』の語り手の退場などと共に、ディケンズの初期作品に見られがちな欠点の例としてしばしば言及

され、非難される。例えばアンガス・ウィルソンはアメリカを舞台として導入することで「非常に独創的ではありながら、非常にむらの多い作品に変わってしまった」という事実を、否定することはできない」(Angus Wilson 174)と指摘している。ジョン・ルーカスも、売り上げの減少と作者自身がアメリカ旅行で経験したトラウマなど、「それを入れるどのような理由があるにせよ、アメリカの場面は確かにかなり困ったものである」(Lucas 125)と批判する。一方でウィルソンは、「初めて現実に富んだいかさま機構」を創出し「腐敗社会の象徴的主要素としての意味を持たせている」(Lucas)として評価もしており、「初めそう見える以上に、必然性を持って小説の利益に結びつけている」(Marcus 240)という批評家もいる。この節では、

ベックスニフ氏に破門されたマーティンがアメリカ到着後に知り合ったチヨーク將軍は、イギリスのことを「人情知らずのおふくろさん (unnatural parent)」と呼ぶが、英米の関係を独立した子供とその親と考えると、アメリカでの経験はまさに親が子供によって手痛い目に合う、というエピソードの連続であるといえる。エデンへの移住とその末にかかる病気がクライマックスであるとする、アメリカ上陸以来そこに至るまでの種々の出来事とそれに対してマーティン青年が感じる困惑は、子供の考え方や振る舞いに戸惑う親の姿を彷彿とさせる。

例えば船に乗り合わせたダイヴァー大佐は、「大衆の指導者」である新聞の文書偽造をあっさりと認め、「偽造の業はこの国

で発明されたもんじゃない……われわれはそうしたもんですべてを古い国イギリスからもちこみ、その責任は古い国にあり、新しい国にあるんじゃないやありません」(第一十六章)と言い切る。これは、親子(イギリスとアメリカ)の類似性を示しながら、自らの欠点を全て親のせいにして責任逃れをする子供の姿を思い起こさせる。また、強烈なタバコの匂いに包まれたポーキング少佐はたんつぼにつばを吐き散らす癖があり、食事の合図の鐘を聞くと青年を置き去りにし、火事ではないかと慌てるぐらいの勢いで食堂へ突進して行く。食堂では、人びとが話もせず到大層な勢いで食事を詰め込み、さっさと寝室に引き上げてしまうのである。このように粗野な行動は、若い国アメリカの洗練を欠いた側面を表現すると同時に、まるで『骨董屋』のクウィルプの食事風景のように、そら恐ろしいほどの生命力とエネルギーをも示唆している。<sup>16)</sup>

また、ノリス家では、マーティン青年は「自分の理性が息たえだえの状態にある」のを感じさせられる(第一七章)。この一家は、アメリカには「横暴な階級的差別がないことのはかり知れぬ利点」がある、としながらも、全員が「すべての偉大な公爵、上院議員、子爵、侯爵、公爵夫人、騎士、准男爵」に並外れた関心を示すという矛盾を抱えている。そのうえ、最初は奴隷廃止論者かと思わせながら、黒人は「奇妙な人種」であるとか、「異なった人種のあいだには自然発生的な反感がある」などと「いとも気軽に」言つてのける。アメリカの奴隷制度については『アメリカ紀行』でも言及があるが、「奴隷制度の過

ちと恐怖」（第二卷第一章）と「極まりなく歪んだ醜悪さ」を批判し、奴隷所有地域の新聞に掲載される喧嘩、決闘、殺人などの暴力行為は、「奴隷所有の習慣によつて残忍性がより強められ」た人びとの性格に起因するのでは、と推論している（第二卷第九章）。イギリスでは奴隷制度廃止法が一八三三年に成立したのに対し、アメリカではこの小説が書かれた一八四三〜四四年時点ではまだ制度は存続しており、先の「偽造の業」と同じく、悪い要素が子供に継承されたのを目撃してとまどう親の役割を、ここでもマーティン青年が演じているのである。

さらに、このノリス家をヨーロッパ帰りのフラドック將軍が訪問し、ヨーロッパの「因襲的なこと」、「道德感覚の普及のせまき」、「排他性、誇り、形式、儀式張り」、「人間と人間のあいだに打ち建てた人為的な障壁」（第十七章）を嘆くと、ノリス家の家族全員は熱心に同意する。しかし、身体にぴたりとついた軍服の中で身動きが取れず「固い姿勢」を取ったり、「男らしい胸を見せよう」とし、「勇敢なる指揮者よろしくの姿で……全員を閲兵」する様子はその言葉が表面的なものにすぎないことを露呈している。何より、登場した瞬間につまずいて倒れ込み動けなくなる姿は、先述のベックスニフ氏のものと同重なり合い、両者の喜劇性と偽善性を効果的に暗示している（図版④）。事実、その直後、マーティンが將軍と同じ船で渡米した三等船客であったとわかると、一同は「死のような沈黙」に襲われる。彼らは、進歩的で開放的な価値観を持つかのように振る舞いながら、ニューヨークの上流社会を代表する家に貧しい



図版④「フラドック將軍!」（第17章、フレッド・バーナードの挿絵、ハウスホールド版）

舞踏会用の盛装で勢い良く飛び込んできたものの、絨毯につまずく。

人物を受け入れたことに屈辱を感じたのである。ここには、「真実は姿をあらわさなければ」と考えたマーティンが、その真実に打撃を受けるという皮肉がある。

また、マーティン青年はチヨーク將軍に勧められてエデン士地会社への投機を検討するが、周旋人スキャダーの描写はこの投機話の虚偽性を予感させる。話すたびに「なにかが喉でピクリとあがつて」くる様子が、「唇のところまでおどりがあがつていこうと弱々しい努力をしている〈真実〉」と描写され、「真実が唇に到達したことは絶対になかった」とされる彼は、片目の視力がないたため、実際に「それぞれの横顔がちがった表情」（第二章）を持つており、表面とその下に隠された真実、という二面性を象徴する人物である。ここで、小説の第三章でマーティン老人がペックスニフ氏に対して言った、「相争う兄弟、親にさからう子供、友人の顔を踏みつけにする友人」という言葉があらためて想起される。投資を持ちかけた「新しい友人」チヨーク將軍は、まさに、マーティンを「踏みつけに」するのである。最終的にエデンで彼を襲う病は、新世界が旧世界に対して目に見えない無言の攻撃を加えて、ついには退散させてしまう極致として効果的に機能している。<sup>17</sup>

マーティン青年の経験は、旧世界から独立して独自の価値観を持つとうとする新大陸が、やはり古い習慣や悪癖を引きずっていることを如実に示している。同時に、目の前の黒人を楽しませようと悪気なくマークの歌う『ブリタニアよ、支配せよ』は、隠然たる旧世界の支配力の象徴と考えられる。これは先の老

マーティンやチャフィーに見た老人たちの復権と照射し合い、継承と世代交代に内在する問題点を全く別の視点から浮き彫りにしているといえるのである。

\* \* \* \* \*

以上のように、この小説はチャズルウィット一族が引き起こすさまざまな事件を通じて、継承／世代交代と変化が内包する問題を提示している。中でも、財産目当てで父親を殺害するというジョウナスの目論みが、実は父親とチャフィーに感づかれていたという事実は、旧世代と新世代の関係性において最も示唆に富んでいる。毒薬を発見した老人はすぐに財産譲渡を決意し、また薬を飲んだふりをしておいて、息子が後悔した時に、気づいていたことを知らせて許す計画まで立てる——「自分自身身のせがれをもっとましなものに育てあげ、自身も、たぶん、もっとましな人間になる」（第五章）ことを希望しながら。主人の意図を汲み、臨終の際の約束に忠実であろうとしたチャフィーも「沈黙を守って」、父親そっくりのジョウナスを守ろうとするのである。マーティン老人が、「われわれの誤った生涯の生みだした呪われた収獲は、足で踏みつけてつぶしてしまふことにしよう」と発言するのに対し、アントニーの息子への愛情は、死後も不孝な息子を包みこみ、ある意味での密やかな支配力を及ぼし続ける。一方マーティン老人は、「惜しみなく経済的援助をしてやって、ふたりの親愛の情と尊敬を獲得する

権利を確立」しようと考えていたが、孫たちが勝手に結婚話を進めたことに腹を立て、決別してしまう（第五二章）。しかし実際には、質屋通いをして困窮していた孫に匿名で送金したり、解雇されたトムに勤め先を用意したり、密かに陰から見守り援助を続ける。つまり、前の世代から自由になろうとしている若い世代は、実は前世代の影響力から完全には自由にはなっていないのである。

ヴィクトリア朝はまさに「変化を生む」時代であり、進歩や発展と結びつけて考えられがちであるが、「時がゆつくりと掘ってきた火薬は一挙に炸裂し、前には岩だったものが、ただの砂とほこりになってしまう」（第一八章）という表現を見ると、その大きな破壊力により、これまで盤石と思われたものを完全に崩壊させ、そこで継承が途切れる可能性があること、さらには、前の時代とは大きく異なる社会や価値観のなかで置き去りにされ、抑圧されて周辺に追いやられたものが多かったことを感じずにはいられない。この小説は、まさにそのような声なきものたちの存在を表面化させることで、暴力的なまでに急速な変化に対する警鐘を鳴らしている。しかしその一方で、旧世代から新世代への隠然たる影響力や、ナジットやギャンプ夫人のようにあまりにも巧みに生き抜く老人の姿の中に、前世代のものが継承されることの中に潜む否定的な可能性も暗示されている。<sup>18</sup>最終章で、この小説のモラルセンタートともいえるトム・ピンチが、自身の子供は持たずメアリの娘を慈しんでいる姿は、冒頭のチャズルウィット一族の系譜と照射し合い、悪の

要素のみが継承され善が継承されないことに対する危機感をよりにっそう強める役割を果たしている。ディケンズの「変化の世に生きている」という意識（House 137）は、『マーティン・チャズルウィット』において、「変化」を肯定的にも否定的にも捉えることが可能であることをさまざま側面から示唆し、次の『ドンビー父子』で扱われる「大変化」のテーマを予示する結果となっているのである。

注

1 「生と死の推移で息子からドンビーへと昇格」（第一章）を繰り返してきた一族の当主が顕著に示すものは「家名の存続への執着」である（Newson 214）。

2 Kay Heath, *Aging by the Book: The Emergence of Middle-life in Victorian Britain* (Albany: State U of New York P, 2009) 62.

3 John Tosh, *A Man's Place: Masculinity and the Middle-Class Home in Victorian England* (New Haven, CT: Yale UP, 1999) 47.

4 『リトル・ドリット』の「にらみつける」太陽（第一巻第一章）や「街路に向って顔をしかめている家々」（第一巻第三章）、『ドンビー父子』の「勝ち誇った怪物」である汽車（第五五章）など、例は多数ある。

5 ケイ・ヒースは一八五〇年代の『荒涼館』から『リトル・ド

リット』に至る作品では、中高年の男性と若い女性の恋愛や結婚が扱われ、作者自身の加齢への関心を示す、と指摘しているが (Heath 42)、そのテーマはすでに『マーティン・チャズルウィット』にも垣間見えることができた。

6 エリックソンによるライフサイクルのモデルでは、成人期は「世代継承的」「ジェネラティブイティ (次世代育成への関心)」の時期とされている。E・H・エリックソン/J・M・エリックソン『ライフサイクル、その完結』(村瀬孝雄・近藤邦夫訳、みずす書房、二〇〇一年) 八八―九五頁。

7 Karen Chase, *The Victorians & Old Age* (Oxford: Oxford UP, 2009) 7.

8 Richard C. Pallis, "Growing Old along with Me: Images of Older People in British and American Literature," *Perceptions of Aging in Literature*, ed. Prisca von Doroika Bagnell and Patricia Spencer Soper (New York: Greenwood, 1989) 37.

9 Mike Featherstone and Mike Hepworth, "Images of Positive Aging: A Case Study of Retirement Choice Magazine," *Images of Aging: Cultural Representations of Later Life*, ed. Mike Featherstone and Andrew Wernick (London: Routledge, 1995) 31.

10 Teresa Mangum, "Growing Old: Age," *A Companion to Victorian Literature & Culture*, ed. Herbert R. Tucker (Malden, MA: Blackwell, 1999) 98.

11 Pat Thane, *Old Age in English History: Past Experiences, Present Issues* (2000; Oxford: Oxford UP, 2005) 167.

12 Derek Brewer, *Symbolic Stories: Traditional Narratives of the Family in English Literature* (1980; London: Longman, 1988) 122.

13 『リトル・ドリット』の、「全く善など持たない人物が(残念ながら男にも女にも)いるのよ……人類の敵として扱わなきゃいけない人間がね」(第一巻第一章)という言葉は、まさにサイクスそのものである。

14 殺人後のジョウナスも「殺された男が自分より前にここ(自室)に来ていたら」という非現実的な恐怖を感じる(第四七章)。

15 Herbert C. Covey, *Images of Older People in Western Art and Society* (New York: Praeger, 1991) 43.

16 『骨董屋』の悪人クイルプは、殻つきの卵や頭と尾のついた海老を噛み砕いて飲み込む(第五章)。

17 『大いなる遺産』や『荒涼館』などで、病が主人公の成長や再生のきっかけになると同様に、マーティン青年の「利己心」に満ちた精神が成長する一因となっている。

18 社会の「重荷」になる老人より、財産や権力に強くしがみつきすぎる老人の方が、やっかいであったと考えられる、とマンガムは指摘している(Mangum 101)。